

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日 雑誌特別扱承認証第六一七号
平成三十年一月一日発行 第百二十一卷 第一号

ホトトギス

一月号



風雅の小筈〔一〕

廣 太 郎

このホトトギス平成三十年一月号から、今まで連載していた汀子名誉主宰の「俳句随想」から新しく「風雅の小筈」と題して私廣太郎がお届けする事になった。「ふうがのこばこ」と読んで頂ければ幸いである。

さて、第一回目にあたり、今後ホトトギスの歩むべき道、というの少し大袈裟かも知れないが、ホトトギスが未来に向かつてどのような方向性を持って良いのかを、私なりに掻い摘んで申し上げたいが、このホトトギスと言うまでもなく、俳句の「結社誌」として位置付けられている事はどなたも否定しないだろう。その昔は「結社の時代」と言われていた時期もあり、この結社誌という存在は俳句界の中心を成していた一時期もあつた事も事実であるが、最近ではあまりこの言葉を聞く機会すら少なくなり、俳句愛好家と言われている人の中でこの結社に所属しているのは果たして何パーセント位になるのだろうか。この稿を認めているのは平成二十九年十月前半である。日本の国内では衆議院が解散して選挙の話題で持ち切りである。これは幣杜ホームページの「奔走主宰」でも話題にしたが、ある、俳句を始められてから長年どこの結社にも入っておられないお若い俳人が御自身の御意見として、衆議院解散後多くの政治家が、あつけなく離党して今後の政党を決め兼ねている言に重ね合わせて、御自身も結社が決まれない、とおっしゃるのである。確かにそれは一つの御意見かも知れないが、反対に多くの、結社に属しておられる俳人の方の御意見はどうであるか。結社の魅力についても今後語って行きたいと思うのである。

句日記 汀子

平成二十九年一月四日 ロイヤル俳壇

筋書きのなき初夢となりしこと
先づ墨を選ぶことより筆始
雪国の消息として聞くことも
初夢を忘れしことも忘れをり
明るさの誘ふロビーの松飾

一月七日 芦屋ホトトギス会

卒んで早暁を発ち来たりけり
花の色やうやく見せて寒牡丹
初句会らしき雰囲気とのへり
松納め来し人々の顔揃ふ

一月八日 下萌句会

寒の雨いよよ本降りとはなりし
お雑煮を出す人数の揃ふまで

一月十日 大阪倶楽部

書初やいつもの筆を洗ひ置く
遅れ来しこと悴みてをりにけり
今もなほ忘れぬ歌留多口遊び
外出の手順ととのへ寒の内
一人づつ今年の抱負初句会

一月十日 綿業倶楽部

三寒も四温も家居許されず
早暁を覚めて四温の旅立ちに
風花と思ふ間もなくつり来し
お雑煮を頂く心づもりあり
齟齬ありてより悴んでをりしかな

一月十一日 高山右近列福記念

月仰ぎ 惚ぶ 右近の御生涯
一月十二日 清交社

成人の日と気づきたるロビーかな
乗初や通ひ慣れたる高速路
新年の抱負に会を締め括る
会食を終へてこれより初句会
成人の日の華やぎを抜けて来し
万両の所在に気づきたる狹庭
一月十三日 工業倶楽部

飛機に見し富士へ初旅なりしこと
家族皆揃ふことより去年今年
連載を書き上げしこと去年今年

一月十四日 櫻心会

雪のこと案じぬしほどなく着きぬ
箱根路の富士に近づくと寒さかな
日当りて風花消ゆる虚空かな
雪もよひ纏うて着きし山ホテル

一月十五日 第二句会

足凍てて遂にロビーへ引返す
身に纏ふ寒さに富士と対峙して
凍雲を払ふ日の出の富士を見し
一月十六日 青嵐俳句会

近き島訪ふ日待たるる春近し
一年の過ぎゆく早さ春を待つ

暖かき島の春秋語りたく

一月十七日 有恒俳句会

関ヶ原雪を抜けゆく旅路あり
初旅を終へくつろげる心かな
雪抜けて行く感動が心配に

関ヶ原やはり吹雪でありしこと
松取られて心仕事に改る

寒の内らしき句会となりしこと
一月十七日 無名会

旅路あり吹雪を抜けて来し車窓
富士の雪遠ざかりゆく家路かな
寒牡丹庭の一景引き締むる
落葉せし庭木に余る日差かな
初旅の帰路分れ路のあることを
初旅を語るともなく再会す
一句会済ませてつづく初句会

一月十八日 夏潮句会

皆揃ふまで火を育てぬし焚火
終りけり焚火の匂ひ身に纏ひ
又今年焚火奉行は庭師なる
東西に分れし旅の雪の齟齬
焚火して庭の春秋はじまりし
恒例の新年句会とて庭に

一月二十日 アネモネ句会

雪もよひ未だ降り出してはをらぬ
雪雲の低し低しと着きにけり
寒灯も心弾めば明るさよ
山会や凍てし心をほどきつつ
寒月や二十二年といふ月日
一月二十七日 時雨句会

寒番や記念館とは庭つづき
順番に行かぬ仕事も春隣
駐車場雪を纏ひしわが車
予定とはあくまで予定春隣
恪勤にあるわが時間春隣

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年一月五日 蕉心会

寒に入る風の表情変りつつ
蕉像のメッキ剥がれて寒に入る
匂やかに嬬やかに初句会かな
寒鯉に引つ張られゆく水面かな
ドアロック解除するより事務始

一月七日 芦屋ホトトギス会

白銀の富士寒晴を突き上げて
丸ビルも三菱ビルも松納
一片の雲も許さず寒の富士

一月八日 野分会芦屋例会

炭の香のたちてより初竈かな
スイッチを回すより初竈かな
独楽回す指が覚えてをりにけり
与りて弥撒はミッション独楽回る
この疵も独楽を回せし跡であり

一月八日 青嵐会芦屋例会

居るだけでいい初夢の中に君
山の気を吸ひ込んでゐる氷柱かな
山の楽奏でて育ちゆく氷柱

一月九日 朝日カルチャー若草句会

初富士に車窓縮んでゆきにけり
初旅といふ故郷の一会かな
初富士といふ白きもの清きもの

猿廻し花子反省してをりぬ
猿廻し言ふこと聞かぬのは次郎
一月十二日 土筆会

一輪に探梅心 祝ぎ心
竜の玉見えざる光放ちつつ
神宿る時 餅花の畏まる
餅花の揺れて揺れざる心かな
一月十四、十五日 高濱年尾先生を偲ぶ初句会

富士現るる風花に空磨かれて
駅伝の余韻冬ざれてはをらず
冬うららクレオパトラを名乗る君
赤々と白々と雪富士日の出
寒月を置き去りにして星消ゆる

一月十五、十六日 年寿会

バスガイドざますざますと冬うらら
修善寺を辿れば寒の修禪寺
待春の心攫はれさうな風
君とならここで凍死をしやうとも
亜米利加を見据える龍馬ならひ吹く
寒月の固まつてゐる朝かな

一月十九日 登高会

寒月に富士の稜線正さるる
寒月に北半球といふ斜面
初明り波間に楽の立ち上る
寒月を揺さ振つてゐる日の出かな

一月二十日 青嵐会東京例会

寒雀日を啄んでをりにけり

句碑一基寒の社を狭めつつ
日を弾き早梅空に紛れざる
寒晴を貫いてゐる電波塔
初竈日出づる国の目覚かな
勝独楽を手に誇らしげなる少女
一月二十四日 若水句会

寒雀日恋ひ餌乞ひ人厭ひ
竹馬や少し地球を遠ざけて
竹馬の上で故郷見渡せる
一月二十五日 目黒学園句会

独楽回す紐に蘊蓄ありにけり
冬草が先に日差を捉へをり
昂りは天神旗を買うてより
冬草の青に鬪志の漲れり
禁縛を解かれし独楽の自由かな
江戸の粹初天神の祝詞にも
勝独楽の武者震ひして止りけり
一月二十六日 きさらぎ会

図らずも賀の旅となる初列車
ハンドルを握る八十路や初乗す
一月二十七日 梅花祭選者吟

探梅に過去絡まつてをりにけり
一月三十一日 むさし野吟行会

夢の島てふ大都市の冬野かな
寒禽を放ち都心の広野かな
被爆船冷たく展示さるる館
悴むや第五福竜丸展示

雑詠

廣太郎 選

ごはごはの風通りけり宿浴衣 東京 岩村恵子
 息止めて止めて手花火落ちにけり 同
 秋の蟬長雨やつと上るらし 同
 青がちに咲く野辺灯し女郎花 伊丹 山口澄子
 まんまるなものの恋ふ夜々や衣被 同
 粒を選ぶことより料る衣被 同
 新酒酌む諏訪の銘酒は神渡 神戸 和田華凜
 カンナ燃ゆ鷹女ゆかりの山の宿 同
 秋の蝶乱るるてふは飛べること 同
 日輪を風の磨きて冬深む 東京 今井肖子
 日差し来て障子の棧のうす埃 同
 青空の寒さに鳥の光りけり 同
 退屈な授業聞くより鱗雲 神戸 藤井啓子
 蚊遣香いつもの宿に落ちつきし 同
 つまべにやおしやれ心は三つより 同
 明易の大東京に目覚めたる 同 千原叡子
 朝湯好まれし高虚子明易し 同
 先生はすぐに見つかりパナマ帽 同

坂井建偲ぶ鶴沼駅の秋 東京 大久保白村
 車窓より虚子の旧居を見る秋思 同
 寿福寺の墓へ坂道竹の春 同
 新涼や雨に艶増す虚子の句碑 神戸 山田佳乃
 花笠の風を起こして踊の輪 同
 さやけしや一刀に文字立ち上がる 同
 星飛んで音なき世界光曳く 高松 永森ケイ子
 行先の定まらぬまま星流れ 同
 消ゆるため燃えつきてをり流れ星 同
 ゆるやかに尾ひれほどきて金魚かな 龍ヶ崎 今橋真理子
 青空へ新涼の風吹き抜けて 同
 夜空へと飛び込んでゆく流れ星 同
 草々の色まだ半歩ほどの秋 東京 橋本くに彦
 ひた走る音の黒さや秋出水 同
 闇一枚光速音速遠花火 同
 虚子も見し信濃夜更けの流れ星 長岡 安原 葉
 旅多き身には欠かせぬ秋扇 同
 在りし日の面影もまた旅の秋 同
 てのひらに銀河より授かる一句 熊本 岩岡中正
 金魚死なしめ落日を見てあたり 同
 楡の大夏木よりウエディングベル 同
 太陽も空も八月十五日 袋井 湖東紀子
 空に星家々に灯よ終戦日 同
 干し上がりがりたる色となる懸煙草 同

雑詠句評(十二月号より)

くに彦・公次・しげ人
仁義・雅・さい雪
紀子・純也・霜衣
佳乃・廣太郎

蜘蛛の囿の虜となりし星の数 大和田 介弘浩司

日本には千種以上いるといわれる蜘蛛である。その姿はグロテスクなためか昔から妖怪視されているが、多くの糸を張る巣の繊細さには驚かされる。これにかかった昆虫を食餌としているのであるが、掲句は星の数である。虜となりしと、表現したことにより作者と蜘蛛の囿、またその先の星空と言う壮大な宇宙の営みまでも想像させる秀句である。(くに彦)

この季題で、こんなに広大な世界を描いた句を筆者は他に知らない。最初に「蜘蛛の囿の虜となりし」とまで読み下すと、当然次は獲物を想像するのが常であろう。それが星であるとは誰が想

像するだろうか。蜘蛛の囿を通して満天の星が広がっている。不思議でもあり、神々しくもある。(廣太郎)

梅雨晴や昼も星ある筈の天 神戸 千原叡子

梅雨が続き、しばらく星空を見ていないため、久しぶりに晴れた真つ昼間の空を仰いだ時、夜空に輝く星座が脳裏に浮び、ここにはきつと星があるはず、という思いに至ったのでしよう。梅雨に飽き飽きして、星空を待ち焦がれる作者の気持が伝わってくるようである。(公次)

虚子が小諸で詠んだ、昼の星を題材とした句が話題になったりするが、こちらは実際見えているという訳ではないのにもかかわらず、季題の性格をよく読み取っている表現をしている。梅雨の鬱陶しい日々の中、たまに晴れた清々しい日、作者はその上の宇宙にまで御覧になっておられるのである。(廣太郎)〈以下略〉

天地有情

散りたくて満開となる桜かな
 花見茶屋朽ちて花鳥の一部分
 ハンカチを持つたかと訊く妻は亡し
 遊子忌の武蔵野緑したたらす
 行く雲に晩夏の心とどまらず
 一稿の仕上りし夜の葛桜
 淋しさのかたまつて来る精霊舟
 露けさに祈り心のやうなもの
 不滅の火拝す山寺露けしや
 虚子館は留守番一人盆休
 火祭の炎たゆたふ能登の海
 雷電像御座す大社の草相撲
 そして星流れてよりの物語
 カンナ赤疲れしときは目を閉ぢる
 吉報は夢でありしか星月夜
 星月夜熱き涙の流れけり
 早梅雨苗しほしほと頭垂れ
 頭を下げて妻の日傘に入りしこと

東京 稲畑廣太郎
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 長岡 安原 葉
 同
 神戸 和田華凜
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 淡路島 木下圭子
 同
 吹田 大橋 暁
 同

中之島にもとんぼうの空があり
 蟪蛄の胴喰はれぬ斧動く
 ひと刻も離れぬ弥陀と松の内
 凡夫なる愚を知り霜を踏みにけり
 大西日とろりと沈む日本海
 大西日呑み込んでゐる大蔵王
 吾は戦前中後語り部敗戦日
 吾はまだ生きてをりしよ水を打つ
 大霧の動いてゐるやゆるやかに
 重なりて茸の上には茸生ゆ
 厨窓雪の気配に手の止まる
 冬紅葉日差さへぎることもなく
 パスポート継続せんと生身魂
 句の縁パリとも繋ぎ生身魂
 六甲の遠 蝸に集ひし日
 蝸の鳴き澄むほどに暮れゆきし
 秋草の華やかにして淋しかり
 かなかなや六甲山の稽古会

神戸 三村純也
 同
 福山 竹下陶子
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 群馬 中杉隆世
 同
 東京 今井肖子
 同
 神戸 千原叡子
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 東京 山田閔子
 同

六子選